

次号予告

特集 脳卒中と理学療法・作業療法

片麻痺に合併する疼痛と理学療法

について.....大阪大病院リハ部 武 富 由 雄

片麻痺患者の上肢機能の予後と決定因子...甲州中央温泉病院 斎 藤 延 男

片麻痺患者の歩行機能の予後と決定因子...厚生連鹿教湯病院 伊 藤 求

退院後在宅片麻痺患者の ADL の予後と決定因子

(理学療法士の立場から).....都養育院病院リハ部 米田 睦男・他

退院後在宅片麻痺患者の ADL の予後と決定因子

(作業療法士の立場から).....東京厚生年金病院 石 川 禎 子

と び ら 積み重ね以外近道はない.....新日鉄室蘭製鉄所病院 山 内 孝 彦

講 座 運動学シリーズⅦ 姿勢と体幹・

頸の運動学(2).....都養育院病院リハ部 柳 沢 健

メディカル 障害者心理(5).....国立身体障害者センター 永 井 昌 夫

プログレス リハビリテーション機器(5).....都補装具研究所 加倉井 周 一

Q and A.....A 緒方 甫・Q 橋元 隆

本の紹介 医歯薬出版編「リハビリテーション

知識の整理」.....東京医科歯科大リハ部 細 田 多 穂

ポール・バツキリタ著

「Brain Mechanism in Sensory

Substitution」.....清瀬リハ学院 宮 前 珠 子

資 料 第 12 回理学療法士・作業療法士国家試験問題

一模範解答(Ⅳ)(1977 年)

編集後記

今回は「障害受容と援助法」という大変むずかしいテーマを選んで特集をしました。リハビリテーションの過程は障害受容の過程であると言っても過言でない程、この問題は大きいと思われます。にもかかわらず、PT や OT の間でこの問題が真剣に取り上げられ、討論されたことは従来あまりなかったようです。精神科や臨床心理の分野のことであって我々には関係ないと思うからでしょうか。それとも、障害後の時間的経過とともに、患者自身が悩みながら獲得していくべきであって、我々ではどう手の下しようもないと思うからでしょうか。

ところが本号座談会で奈良氏や福屋氏の発言にみられる通り、アメリカの病院など

では、少しでも早く障害を受容し、リハビリテートできるように積極的なプログラムが展開されている所が多いようです。障害の回復の見通しを早くから教える、カウンセリングを行う、患者との対立を避けて正面から受けて立つというような方法です。そして PT や OT も患者の立直り上重要な役割りを担うとのこと。今回は、このテーマのオリエンテーションとしてケースワーカー深沢氏と臨床心理士古牧氏に解説をおねがいました。座談会の参加者は、この道 10 年のベテラン揃い、いずれも患者との深いかかわり合いの中で積極的にこの問題と取り組んできた方達です。今後、PT・OT 教育の中にもこの方面の技術が導入されるとよいと思いました。奈良氏の論文「臨床におけることば<のリスク>」と併せ、本号は精神面のことを多く載せる結果となりました。(寺山久美子)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長

五 味 重 春
筑波大学心身障害学系教授

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎医科大学学長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部

佐 藤 馨
神奈川リハセンター

鈴木 明 子
府中リハビリ学院

谷 岡 淳
自治医科大学

寺 山 久美子
都心障センター

福 屋 靖 子

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

明 石 謙

大 井 淑 雄

大 川 嗣 雄

大 橋 博

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

小 林 夏 子

駒 沢 治 夫

佐 藤 剛

田 原 澄 彦

富 岡 詔 子

奈 良 勲

藤 沢 しげ子

藤 本 欽 也

前 田 守

松 本 妙 子

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

横 山 巖

和 才 嘉 昭

(担当 細田・西塚)